

## 「黒衣人」について

廖 莉 平

### はじめに

戯曲「黒衣人」は陶晶孫の中国文壇における処女作として、1922年8月に雑誌『創造季刊』第一巻第二期に中国語で発表され、1927年10月に他の18篇の作品と共に『音楽会小曲』に収載された<sup>1)</sup>。その「後書き」では、陶晶孫は次のように述べている。

この機会に私は愛弁兄（郭沫若を指す。筆者注）に感謝しなければならない。彼は私と一緒に福岡にいた時に、私を励まし、日本語で書かれた作品をわざわざ中国語に訳させた。最初のいくつかの作品、例えば『木犀』や『黒衣人』などは、総て彼の助力がなくては訳せなかった<sup>2)</sup>。

以上の引用から、最初に「黒衣人」を執筆した時に用いられた言語はやはり「木犀」と同様に日本語であったことがわかる。また、郭沫若の助力がなければ中国語版「黒衣人」は恐らく1922年という早い時期には現れなかった可能性が高いと言っても過言ではない。実際に上述の引用文を裏返して言えば、当時の陶晶孫は中国語を日本語のように自由自在に操ることができなかったことを示している。そのため、ところどころ中国語が屈折している「黒衣人」を読み取るには多少骨を折らなければならない。

「黒衣人」は発表されてからどのように読み取られてきたのだろうか。この作品の発表の直後、攝生は「讀了『創造』第二期後的感想」（『創造』第二期を読んだ後の感想）を発表した<sup>3)</sup>。彼は雑誌『創造季刊』第二期に掲載された文章を一つ一つ取上げ、その長所と短所について彼なりの独特な解説をしている。その中で「黒衣人」について次のように評している。

陶晶孫の「黒衣人」は芸術家の生活と悲哀を描いている。表現力が非常に強い。世界は創造されるものであり、また破壊されるものでもある。黒衣人と Teti 二人はなんと愛すべき青年であろう。彼らの死は犠牲のためであり、彼らの死は光栄なことである。作品の構造も当を得ており、一步一步物語を進めている。（中略）しかしながら私はこの一篇はあまりにも神秘的に描かれ過ぎているところがある。彼がとても真心を込めて表現しているにもかかわらず、あいまいになってしまうことを免れなかった。これはとても残念だ<sup>4)</sup>。

攝生氏は、「黒衣人」を死への賛美を取り扱う作品として捉えており、大いに絶賛していた。しかしながら他方では創作方法について肯定的な評価も与えたものの、不満の意も述べている。これは他

でもなく作品にみられる神秘性についての批判である。20年代初期の中国文壇で象徴劇が注目を浴び始めた頃で<sup>5)</sup>、後に象徴劇中で最も典型的な作品と評価されたこの作品<sup>6)</sup>が当時の知識人に完全に理解されるのは到底無理なことであったろう。現在に至るまでこの作品に対する読み方は攝生氏の「彼らの死は光栄なことである」と似通った視線——死の賛美、が継承されている傾向がみられる。前述したように、陶晶孫の中国語は多少屈折しているため、完全に読み取るのは至難の業である。従って、今まで多くの論者はこの作品の全体を咀嚼せず、攝生氏のように主に死に関する部分だけをクローズアップし論じてきた。しかし、作品をよく理解するためには断片的な説明のみでは不十分であるといわざるを得ない。

また、80年代に入って、中国に再び西洋文化が大量に入り込んできて、「黒衣人」に現れる象徴手法も再認識されることになった。そのため「黒衣人」研究においても象徴手法に焦点をあてて論じてきた論者もいるが、陶晶孫を取り巻く20年代の日本文壇に言及した例はなく、「黒衣人」に影響を与えたと見られる作家・作品との関連性について厳密な分析が行われてきたとは言い難い<sup>7)</sup>。

本稿では、「死の賛美」という従来の「黒衣人」の読みとは視点を変え、黒衣人と Tett 二人の關係に注目しつつ作品を読み直して分析し、新たな解釈を与えたい。最後に、「黒衣人」と外国文学との関連性について触れつつ創作動機を探ってみたい。

### 1. 大人に対する嫌悪感と兄弟の一体感

「黒衣人」は舞台が前景、中景、後景と配置され、秋のある黄昏の二人の兄弟の死を巡って展開する一幕劇である。最後の場景が前景に当たる湖畔で起こる以外、総ての出来事は中景に配置された黒衣人の屋敷で発生する。作品の粗筋は以下ようになる。

湖畔から少し離れたところに二人の兄弟が住んでいる。秋の夜が一層寂しげに感じられた二人は室内でピアノを弾くことにした。ピアノを弾き始めるとこれまで二人が営めてきた悲惨な往事を思い出し始める。いつの間にか兄の黒衣人は気が狂い、風、雨、雷などを盗賊と錯覚して発砲したところ、弟の Tett に命中してしまう。あたかも弟の死を待ち望んでいたように兄は弟の死を見届ける事ができたと安心し、弟の死を賛美する。遠方から人の声が聞こえた黒衣人は自分に銃を向け、銃声と人の呼び声が交錯するなかで幕が下りる。

従来、この作品を解釈する時、後半部分に当たる Tett と黒衣人の死と、黒衣人の死への賛美のみが注目されがちである。そのため、読者の視線が専ら黒衣人だけに向いてしまい、もう一人の主要人物 Tett に関する分析が看過されてきた。しかし、この作品を明白にするためには、黒衣人と Tett の二人の人物の關係や、この二人の人物のおおの性格・特徴をはっきりさせておかなければならない。

ところで、舞台で演じられる「黒衣人」は場景の変化によって劇が展開するように見られるが、この場景の変化を引き起こすのは黒衣人の回想である。「黒衣人」を一読すれば、戯曲は現在の事柄と過去の出来事を絡みあっていることは簡単に読み取れる。ここでまず、下の〈表一〉のように戯曲の進行に沿いつつ、舞台を六つの場景に分け、その上で回想と現実に二分し、それぞれの現在と過去での出来事における関連性から黒衣人と Tett の二人の人物像を解明したい。

〈表一〉（丸数字は戯曲中に描かれた順序による）

〈表一〉（丸数字は戯曲中に描かれた順序による）

| 場景                        | 現在   | 回想  |
|---------------------------|--|---|
| A 室内にいる Tett と室外にいる黒衣人の会話 | ① Tett が寂しいという<br>② 黒衣人は自分が直ぐ死んでしまったら Tett はどうなるのかと心配する<br>③ Tett は死を否定する。そして室内に移ってピアノを弾くことを提言する<br>④ 黒衣人もそれに賛成し、室内に移る                                       |   |
| B 灯りをつける前の暫くの暗黒の間         | ① Tett は暗がりを怖がっている   | ② 黒衣人は子供の頃に好きになった香姉のことを思い出す   |
| C 灯りがついた屋敷の一階のピアノの横       | ① Tett は兄にピアノを弾くよう頼む<br>④ 黒衣人はベートーヴェンの「葬送」を弾く<br>⑤ Tett は死の意念を語る   | ② ピアノを弾き始めた黒衣人は「彼女」を思い出す<br>③ Tett も耶姉のことを思い出す<br>⑥ 黒衣人は途切れ途切れに二人が嘗めた悲惨な過去を思い出す |
| D 一階のソファーに移る              | ① ソファーで暖を取り合った Tett は黒衣人の身体が冷たいと言い出す<br>② 死者は冷たいが自分がまた生きており、傷つけられた魂を誰に訴えればよいのかと叫ぶ<br>③ Tett は聞き役になって話を聞いてあげようと話しかける<br>⑤ 黒衣人は雨や風等を盗賊と錯覚する<br>⑥ Tett はそれを否定する | ④ 黒衣人はまた過去を語り始めるが、途中で Tett に止めさせられる   |
| E 二階に上がる                  | ① 自分と Tett は二人とも盗賊を恐れないと黒衣人は語りつつ銃を撃つ<br>② 死神を撃たないでくれと Tett は黒衣人に頼む<br>③ Tett が死神に捕えられかねないと思った黒衣人はまた銃を撃つ<br>④ Tett が廊下に倒れる<br>⑤ 黒衣人が二階から降りる                   |   |
| F 湖畔の横                    | ① Tett の死を確認し死を賛美する<br>② 室内に入り、銃を手にし、再び湖畔にくる<br>④ 遠くから人々の声を感じ取った黒衣人は自分に銃を向ける   | ③ 幼女の彫像、黒衣人と Tett 三者の関係について回想し、精神病を持つ家の歴史を語る                                    |

さて、黒衣人についてみてみよう。名前の代わりに服装の特徴によって黒衣人と呼ばれる主人公は成人男性と設定されている。身を包んでいる黒衣が多かれ少なかれ彼の性格を暗示している。一方、作品は舞台の背景の空を頻繁に「黒」（暗い）と描いている。まず、劇が始まったところで（場景 A に当たる部分）、室内でピアノを弾くことを提言した Tett に向かって、黒衣人は「（前略）空が暗くなってきた。見てごらん、この下の湖の岸がもう見えなくなった。今夜は本当に暗い」という<sup>81</sup>。これを耳にした Tett は同意するように「ああ、本当に暗くなってきた」と答える。また、室内に入り灯りがついてから（場景 B から場景 C に変わる部分に当たる）ドアを閉めようとする Tett は「ああ、

全く暗くなった」と強調するように独り言をいう。

こうして見れば、場景Aから場景Cに変わる短い文章の中に四回も「黒」という形容が使用されている。読み手あるいは観客が彼らの台詞を通して時間設定や状況をはっきり把握できることは指摘するまでもないが、暗黒の空と渾然一体となる黒衣に身を包まれた黒衣人との接点を考えれば、この「黒」が重要な意味を示しているといわざるをえない。更に、錯覚に陥った黒衣人が、

死神がきた。そうじゃなければ僕自身は死神だ。僕の肉体は死んでいる。僕は絶対の黒色になり、死神が既に僕の魂の髓に入り込んだ。

と叫ぶように、「黒」は死を暗示している。すなわち、黒衣人は単に Tett の兄として登場しているだけでなく、死神の分身としても描かれているのである。

では、戯曲の中で生身の人間としての黒衣人はどのような人物として描かれているのだろうか。

僕は君に死の観念を知ってほしくなかった。のびのびと成長してほしかったが、完全に失敗した。僕は君に人を食べる狼の物語を知ってほしくなかった。僕は君に月の世界を観察することを教えた。(中略)しかし間もなく君は忘れてしまった。君が忘れたのではなく悪魔に奪われてしまったのだ。

ここで引用された文章は場景Cの⑥に当たる部分、黒衣人が弾いたベートーヴェンの「葬送」の曲を聴いてから今日死ぬかもしれないと口にした Tett に対して黒衣人が発した言葉である。人は大人になると死を自然と意識する。Tett に「死の観念を知ってほしく」ないと期待した黒衣人の願いは、Tett が大人になってほしくないと願うのと等しい。そのために現実には目を向けよう、速く離れた月の世界しか Tett に教えなかった。しかし、黒衣人以外の人が Tett に何をするのか、これは黒衣人の力が及ばない範囲のことであった。他人が Tett に教えた「人を食べる狼の物語」とは一体どのようなものだろうか。黒衣人の言葉の中では明白にされていないが、黒衣人が愛した香姉のことを思い出した部分を引用してみよう (Cの②)。

僕は厨房に行って香姉ちゃんが一人で泣いているのをみた。— ああ、この日から香姉ちゃんは既に僕たちの家の人じゃなくなった。その後二年も経たずに彼女は、この世の人じゃなくなった。彼女は自分が肺病であることを知った時から薬をすっかりやめてしまった。— 丸々の大きな目をして僕たちの可愛い香姉は思いもよらず貪欲な狼の口に落ちてしまった。ああ、お前たち貪欲な狼よ、僕はいつか必ず仇を討つ。

黒衣人と香姉との関係を上の文章から完全に読み取ることは無理であり、香姉が他家に嫁いだのか、入院したのかをはっきりうかがうことはできない。しかし、香姉がある種の脅迫によってやむを得ずこの家から離れたことは容易に想像できる。「貪欲な狼の口に落ちてしまった」と香姉の最期が描かれているが、当然本当の狼ではなく香姉を家から出した貪欲な大人の暗喩であることは言わずもがなのことである。第三者が Tett に教えた「人を食べる狼の物語」が香姉の身の上にかきたことと似たような物語だと簡単に想像がつく。

俗世間のことを知れば知るほど、Tett は月の世界のことを忘れていく。黒衣人はこれらを総て「悪魔に奪われてしまった」と言う。ここでの「悪魔」は何を指しているだろうか。

間違いなく、悪魔は君を奪い取ったのだ。悪魔は君の優しくかつ猜疑心のない心を呑み込んだのだ。花の蕾が出たばかりなのに摘みにくる爪がある。葉の芽が出たばかりなのに食べにくる虫がいる。世間は総てこのようなものだ。正は邪になり、是は非になる。

ここでの「悪魔」の描写と先の「狼」の描写に似通った部分があることは一読して直ぐ分かる。「優しくかつ猜疑心のない心」を失うことは子供心がなくなることを表しており、「花の蕾」と「葉の芽」が「爪」や「虫」に破壊されることは純粋な子供のままこの世で生きていくことはできないことを暗喩している。黒衣人は Tett の純粋な心を壊す大人を批判しているだけでなく Tett について語りながら自分自身が大人になったことを嫌っていることを強く訴えている。

次に作品における Tett の位置づけをみてみよう。「今日は本当に寂しい」(場面 A の①) という Tett の台詞から劇は幕を開ける。Tett はまだ12歳に過ぎないが、寂しさを感じられることは何よりも彼の変化——天真爛漫な子供から大人になりかけていることを表している。このことは、共に登場する黒衣人にもひしひしと伝わってきたはずである。しかし、何の理由もなく突然にこの寂しさを湧き起こるわけがない。一体、彼の身にどのようなことが起こったのだろうか。実際に作品を通覧しても明確にこれについては何も語られてはいない。その後の展開は総てこの台詞に結びついており、この作品を解明するためには Tett に寂しさをもたらした根源を見つけ出すことが最も重要な鍵である。

ここで筆者は、最初に Tett の寂しい気持ちが死への意識に変わった場面に注目する。これは彼がピアノの横に移り、黒衣人がピアノを弾いた場面である(場面 C)。ピアノを弾き始めた黒衣人は「彼女」のことを思い出し、「以前脚光を浴びる舞台で彼女のために僕も伴奏したことがある」と語る。黒衣人の口にした「彼女」は、前後の文章を吟味してみれば香姉を指していると指摘することができる。黒衣人の言葉に対して、Tett は「僕も弾いたことがある。耶姑娘は歌が本当に上手だった」という。作品において耶姑娘(「耶」という娘の意)に触れた箇所はただこれのみである。この場面の描写が非常に簡潔で、語りぶりもはっきりしないため、従来の研究は Tett と耶姑娘の関係、つまり Tett に寂しい気持ちをもたらしてきたこの重要な人物である耶姑娘の存在を無視してきた。

耶姑娘のことを口にしたが早いのか、黒衣人は「ああ、すまん!」と Tett に謝った。なぜ黒衣人は Tett に謝らなければならなかったのだろうか。それは他でもなく耶姑娘に関する苦い思い出を Tett に思い起こさせたからである。耶姑娘について作品の中でそれ以上触れられていないものの、兄弟二人のやり取りからみれば、Tett と耶姑娘の間に何か悲劇的なラブストーリーが起こったことが窺われる。今は無論、彼らの傍に耶姑娘はいない。他人の家に嫁いだかあるいはこの世から去っていたか、作品の中で明確に説明されていないが、黒衣人が愛した香姉と多かれ少なかれ似通った運命を持つ女性であることは察知できる。

このような暗い雰囲気から抜け出すために黒衣人は「僕たちはもっと元気を出すべきだ」と言いつつ、ベートーヴェンの「葬送」を弾く<sup>9)</sup>(Cの④)。しかし、悲しいメロディーに耐えられずに途中で演奏をやめてしまう。死者を送る時に流されるこの曲は元来の暗い舞台に更に暗く悲しい雰囲気をもたらす。これに應えるように、早く死ぬかもしれないという兄の言葉に非常に不信感を持っていた

Tett がここに到って、「今日僕は——体の調子がよくない。万が一……万が一死ぬならばお兄さんの手の中で死にたい」と、死を口にする（Cの⑤）。

耶姑娘を思い出したことをきっかけに Tett が寂しい気持ちから死への意識に転換したことは上述するとおりである。従って、舞台に登場したばかりの Tett はまだ子供らしさを残していたが、香姉と耶姑娘を巡って「死」というものを意識するにつれ、次第に兄の黒衣人のような大人に変化する過程にあることがわかる。

さて、死に関してこの時点では Tett と黒衣人は一体感を感じている。しかし、Tett の口から死について聞かされた黒衣人は、また長々と語り続けているうちに狂気に襲われたように錯覚に陥る（場面 D の⑤）。一方、Tett のほうは正常な人間がとるであろう行動をとる（D の⑥）。ここで再び二人の相違が現れる。

黒衣人：ふん、お前たちはこの上まだ何を撃ち始めたのだ？

Tett：お兄さん、それは雷だよ。お兄さん！（泣き止まない）

（絶望的に）お兄さん、そんなことはあるはずがないよ。（原文“没有那样的事情！”）

それは二階に連れられあがってきた Tett が、雷を盗賊と錯覚した黒衣人に発した言葉である。ここで下線を引いている部分に注目されたい。その前にまず、劇の開幕のところを再びみてみよう。

黒衣人：もし兄ちゃんが直ぐに死んでしまったら、君はどうする？僕はやはり心配してる

Tett：そんなことはあるはずがないよ。（原文“哪会有那样的事情呢！”）

ここで直ぐに死ぬかもしれないと黒衣人の話を聞いた Tett は即座に「そんなことはあるはずがないよ」と否定し、黒衣人の死に対する観念を理解し難い姿を示す。それと同じく、雨や、風や、雷などを盗賊と思い込んだ黒衣人の行動をみた Tett は、うわ言のように聞こえてきた黒衣人の話を再び否定しようとしている。

黒衣人：ああ、見ろ、僕の腕前を！僕の弟は僕の宝石だ。僕は僕の弟の庇護者だ。僕は人生の一切の試練を経験してきた。Tett も経験してきた。僕と Tett は既に死に接したことがある。僕たちはお前たちを恐れない。

Tett：お兄さん、あそこ！あそこ！……（中略）

Tett：死神を撃たないで、死神を撃たないで！

しかし、兄が言ったことをそれまで否定していた Tett は自分では意識しないまま黒衣人と同じ行動をとってきたことが窺われる。これまで Tett を宝石のように大事に育ててきた黒衣人はずっと Tett の味方であった。子供である Tett は、黒衣人にとって大人世界に汚されていない純粋な少年であり、ずっと憧れていた少年との生活を実現させてくれる原動力である。そのため、大人の世界に入った兄弟が何人もいたにもかかわらず、特に Tett と影と形のように常に一緒にいたことは正しくその間の事情を物語っている。黒衣人の言葉が Tett の心の琴線に触れたのか、結局 Tett も狂気に襲われた黒

衣人と同じく錯覚に陥る。ここで再び黒衣人と Tett とは接点を持った。つまり一体感を感じることができた。このように、Tett は既に大人の世界に入ってしまった黒衣人よりいつも一足遅く、自分を取り巻く環境から黒衣人の感じ取っていたことを追体験してきたことが窺われる。このように、Tett が一步一步変わっていくことによって黒衣人との一身体の関係がはっきり浮き彫りにされたといえる。

前述したように、「黒衣人」は大別して回想と現実という二つの部分に分けることができる。また、これまで分析してきたように、回想を通して黒衣人の大人への嫌悪感、現実を通して Tett の心理変化を示しつつ、二人の一体感に結び付けていく陶晶係の巧みな構成に気づく。過去がなければ現実の出来事は成り立たず、現実の進展がなければ過去を振り向かない。つまり過去があるからこそ現実が存在するのである。換言すれば、Tett の心理変化と黒衣人の大人への嫌悪感という、一見すれば遠くかけ離れているこの二つの事柄は実は切っても切れぬ関係を持っているのである。

## 2. 黒衣人の中の Tett Tett の中の黒衣人

前節で、黒衣人は Tett を通して大人になっていくことを嫌悪していることと、Tett の心理状態の変化によって黒衣人との一体感が感取できることを指摘し、この二者には切っても切れぬ関係があることを示した。しかしながら黒衣人の大人に対する嫌悪感と Tett と黒衣人の一体感を描くことによって最終的に作者は読者に何を言おうとしているのだろうか。

〈表1〉に示しているように、作品はAの場景とEの場景を除く総ての場景において過去の事と現在の事を紡ぎつつ展開している。つまり、物語の中にまた幾つかの物語が重なっている。Eの場面では直接過去の事を描いていないものの、自分と Tett の関係について話す黒衣人の語りぶりから、黒衣人と Tett の昔の姿を思い浮かべることができる。また、Aの場面は確かに現実視点に置かれているが、開幕直後の Tett の発言から、寂しさに似つかわしくないはずの少年の身に何があったのだろうと、読者は自然に疑問を抱き、その過去に目を向ける。あたかもそれに答えるように、実際にBの場面に挿入された過去に関する事柄はいずれも兄弟二人と関係があるものであった。過去と現在の比重をみても、過去の事がほぼ半分の分量を占めている。こうしてみれば「黒衣人」は舞台では秋のある黄昏の出来事を描いているというより、むしろ、過去を回想することによって舞台で起こることの遠因——黒衣人と Tett の死の根ざすところを物語っているといえる。この遠因を明らかにするために、過去の二人の出来事を以下の〈表2〉のように再整理してみよう。

〈表2〉

| 黒衣人                          | Tett                      |
|------------------------------|---------------------------|
| ①子供頃に厨房で香姉が泣くのを見かけたこと        | ①隣の女の子を泣かせたこと             |
| ②香姉が家から出てから二年後に死んだこと         |                           |
| ③脚光を浴びる舞台上で彼女のために伴奏したこと      | ②ピアノを弾きながら耶姑娘が上手に歌ってくれたこと |
| ④ Tett に月の世界を観察することを教えたこと    |                           |
| ⑤両親にアメリカから帰ってきた女の子と婚約させられたこと |                           |
| ⑥兄弟たちの反対を押し切って土地を買ったこと       |                           |
| ⑦三歳の Tett にピアノを教え始めたこと       |                           |

|                               |                  |
|-------------------------------|------------------|
| ⑧外国に何回も渡って留学したこと              | ③外国に何回も渡って留学したこと |
| ⑨何回も荷物を解いてまた片付け、片付けてからまた解いたこと | ④教科書も何回も変えたこと    |
| ⑩幼女の像を彫刻したこと                  | ⑤幼女の像に常に接吻したこと   |

〈表2〉から、黒衣人と Tett が似通った幾つもの経験をしていることに驚かされる。

まず、二人とも好きな女性がいた。幼い黒衣人、つまり現在の Tett と同じ年齢であった黒衣人には可愛い香姉がいたのに対して、Tett にも上手に歌を歌う耶姑娘がいた。そして二人とも好きな女の子のためにピアノを伴奏したことがあった。現実には耶姑娘の行方について一切説明されていないが、前節に述べてきたように彼女の運命は、家から追い出され、病魔にかかってこの世を去っていった香姉の運命と恐らく大差がなかったであろう。共に好きな女の子が似通った運命を辿ったこの二人の兄弟には同じような経験があったといえるだろう。

次に、留学に対する見方。10回ほど海を渡って留学しに行ってきた黒衣人と同じく、Tett も7回ほど同じ経験をした。二人にとって留学することは自ら選んだ道ではなく、「運命に翻弄され」——大人 の意思によって止むを得ずこの道を辿ったのである。それ故、黒衣人は「荷物を解いてはまた片付け、こんなことが何回あったか覚えていない」羽目に追われた一方、Tett のほうも「教科書を何回変えたか覚えていない」という悲惨な目にあった。

最後に、幼女の像と二人との関係。幼女の像が初めて作品に現れるのは舞台の構成を説明した文章の中であり、作品に現れるのは Tett の死体が湖畔に移され、この寝台に置かれたところであると記されている。前述のように陶晶孫の中国語が屈折していることもあり、特にこの像に関する描写には突飛さと曖昧さがあるため、従来の読者はこの部分にあまりに関心を持ってこなかった<sup>10</sup>。しかし、これまでみてきたように作品に登場した諸々は全く意味がないものではなく、何か意味を示している。こうしてみれば作品の後半部分に現れたこの幼女の像も無意味なものではなく、この像を通して作家は読者に何かを訴えようとしていると思われる。

(銃をベットの横に置き、肘かけの幼女の像に接吻した)

ああ、これは決別の接吻だ。Tett は君に何回接吻してきたのか分からない。君を彫刻したのは君に最後の接吻をするためじゃない。僕の鑿がまるで僕がピアノの即興曲を弾くように心のままに君を彫刻に仕上げたのだ。君も間もなく知らないうちに人に壊されることだろう。

上の引用文から幼女の像を彫刻したのは他ならぬ黒衣人自身であることがわかる。黒衣人が「心のまま」に仕上げたこの幼女の像はそもそも誰をモデルにして作られたのだろう。それまで黒衣人の身に起こってきた様々なことを考えてみれば、そのモデルは幼い頃の彼が大好きだった香姉か、当時彼の身近にいた Tett を置いては考えられない。この像が彼の香姉や Tett に対する深い愛情と思いを秘めていることは言うまでもないが、これまで憧れてきた少年少女とともに生活するという意念がこの像に潜んでいることも見逃してはならない。言い換えれば、この幼女の像は単に香姉、Tett という具体的な人物の化身と看做すより、黒衣人にとって純粋な子供——また俗世間に染まっていない少年少女——を代表していると考えべきであろう。そのために、黒衣人は香姉が亡くなってからその思い出を像に託しつつ、現実世界では自分と16歳も離れている弟 Tett を守ることに心を砕いたのではあ



るまいか。三歳の Tett にピアノを教えたこと、死の観念を持たないよう月の世界を教えたことなど、それら総てのことは要するに Tett を大人の世界に近寄らせないための黒衣人の努力なのである。しかし、幼女の像に常に接吻している Tett を目にした黒衣人は、これまでの努力が水の泡となり、香姉が大人に壊されたようにやがて Tett も「人に壊される」だろうとひしひしと感じ取ったに違いない。

上述のように二人には多くの類似点がみられる。これらはただ過去のことを無意味に語り並べられているだけなのだろうか。この答えは無論否である。12歳の Tett と自分の幼い頃の経験とが似通っていることは他ならぬ自分が歩んできた道を今、Tett が歩んでいることを読者に訴えたかったからである。一方、Tett のほうは自分が兄との共通点を感じることができたのであろうか。

黒衣人：（前略）君は八つ当たりされて怒られたことが何回あったか覚えていないだろうね。そうだね。怒りと子供は大人の感情の安全弁だ。君と僕は二人とも泣いたことがあった。僕たちはそれぞれ別々に泣いたことがあった。煩悶に耐えぬとき僕たちはそれぞれ別々に哀しく泣いた。これは何と悲惨なことだろう。僕たちが一緒に泣けるほうがずっといい。僕の涙が君の小鳥のような髪を濡らすことができ、君の涙は僕の虐げられた胸に注ぎこむ――。

Tett：お兄ちゃん、お兄ちゃん――言わないで。――今日のお兄ちゃんは一体どうしたの？僕は――僕はこれからは今までのことを忘れたほうがいいとお兄ちゃんに言ったでしょう。

ここの引用文では、兄弟二人を巡ってどのような事件が起こったのか、具体的に描かれていない。しかし、「八つ当たりされ怒られた」こと、「怒りと子供は大人の感情の安全弁」などの言葉から、これまで二人を取り巻く家庭環境、即ち二人を囲む大人たちはどのような態度・姿勢を二人に示してきたのが窺われる。言葉の裏側に黒衣人の大人への嫌悪感と、これまで二人が遭遇してきたことの相似点も暗に含まれている。それは、当の Tett にも十分伝わったのではないか。あたかも黒衣人の語りと呼応するように、Tett は反応せずにはいられなかった。過去を巡るいろいろな出来事を忘れようと、Tett が黒衣人に向かって呼びかけるこの台詞は、他ならぬ Tett の認識の中にも自分と兄黒衣人との相似点があることを傍証しているのである。前節で Tett と黒衣人の一体感について述べてきた。表面上では Tett は周開の寮開気――ベートーヴェンの「葬送」を聞いて――黒衣人の狂気――に巻き込まれ心理状態が変化してきたと見えるが、実際にその裏側には Tett の身に潜んでいた兄と似通った少年時代の生活があったからこそ、黒衣人と一体化することができたのである。

ところで〈表2〉と照らし合わせると、二人を巡っての出来事が一概に一致しているものばかりでもない。つまり黒衣人に比して Tett の側に幾つかの空欄が空いている。それは何を意味をしているだろう。

今まで分析してきたように「もう大人になってしまった」黒衣人と比べれば12歳の Tett は完全に俗世界に染まっておらず、また純粋な子供心が残っている。しかし、これ以上俗世界に接すれば黒衣人の身に起こったこと、例えば〈表2〉の⑤、⑥のような事件が恐らく Tett によって再び演じられるであろう。それは正しく兄黒衣人が常に心配していることである。開幕直後の黒衣人の「もし兄が直ぐ死んだら君はどうする？僕はやはり心配だ」という台詞に語られた黒衣人の心配は正しくこのよ

うなことを言おうとしている。〈表2〉の右側に空いている空欄は、つまり、これから成長していく Tett が〈表2〉の左側に描かれている事件に遭遇する可能性を示している。しかし、それは同時に、Tett にはまだ救う術があることをも意味している。自分と同じ運命を辿らせないため、あるいは、これ以上自分と同じように大人に操られ、俗世界に無理矢理連れて行かれないために、黒衣人には Tett の成長を止める以外の方法はなかった。彼にとって Tett の成長を止めることは悲しいことではなく、むしろ賞賛しなければならないことである。

Tett ! 僕自身は君の死を見届けることができたので安心して死んでいける。

(中略)

確かに死神の手の中で死んだ! 彼の死は尊いものだ。

確かに彼は死神の手の中で美しいまま安眠している。

Tett の死は尊いものであり、美しいことであると語る黒衣人は、自分と同じ轍を踏むことのない Tett の死を賛美しつつ見つめている。自分の手で Tett の純粋な子供心を永遠に保つことができたことは何よりも重要なことであった。Tett の死を見届けたからこそ、彼も「安心して死んでいける」。これはあたかも自分がもし直ぐ死んでしまったら Tett はどうなると心配していた黒衣人の懸念に答えるように前後呼応している。ここからも陶晶孫が創作する際に苦心に苦心を重ねて作品を構築している姿を窺うことができる。

### 3. 「黒衣人」と「闖入者」

従来、「黒衣人」とワイルドの「サロメ」を関連付けて論じられる一方、象徴手法においてメーテルリンクからの影響があったという論評もある<sup>11)</sup>。しかし、管見によれば陶晶孫自身は彼らについて一度も言及したことはない。陶晶孫がワイルドとメーテルリンクの作品を読んだことがあるという裏付けさえも現時点ではどこにも見つからなかった。従って陶晶孫とワイルド、メーテルリンクとを直接結びつけて考察するのは困難かもしれない。

しかしながら明治末期から大正時期にける日本文壇においては、自然主義の対抗者として紹介されてきたワイルドとメーテルリンクの二人は、当時の Neoromanticism を主張する人々にとって正しく「最も異色ある反撥の波を上げた勇者である」<sup>12)</sup>。それゆえ、文学を愛する青年たちであれば、ワイルドとメーテルリンクの名を知らない人がいなかったのではあるまいか。また、1920年代に入ってから中国でも「サロメ」とメーテルリンクの象徴主義手法が広く紹介され、最も人気のあった「サロメ」の訳者がほかでもなく陶晶孫と同じ創造社に属する田漢であり、この訳本の序を書いたのが当時九州帝國大学に在籍していた郭沫若であったことに留意すべきであろう。一方、田漢、郭沫若等創造社初期の作家たちの作品にもメーテルリンクからの影響が深かったことは既に疑いがたい事実として証明されている。陶晶孫自身は青年時代に中国文学に殆ど関心を払っていなかったというものの、当時九州帝國大学にいた彼と郭沫若との親密な関係を考えるならば、陶晶孫自身もワイルドとメーテルリンクに関して頗る関心を寄せていたと推測できるだろう。

さて、「黒衣人」を「サロメ」と関連付ける際、両作品に出てくる月光の動きの相似点と、愛した死者に接吻する画面の一致性について大いに論じられてきた。しかし、本稿の目的は、これまで重視

されてきた「サロメ」との関係について論じるのではなく、むしろこれまでただ象徴手法の相似点に関して一面的にしか指摘されてこなかったメーテルリンクの「闇入者」との関係について、新たな視点から比較分析を行いたい。

「闇入者」はメーテルリンクの名を一躍高めた「マレーヌ姫」(1889年)の次の戯曲で、1890年に発表された。同時期に発表された他の戯曲と同じく、この作品も彼の象徴主義と宿命論に基づいて作られたものである。粗筋は以下のようになる。

ある月の夜に、一人の年取った盲人の家では息子の妻がお産のあと病気になり、自分の姉と会いたがっている。そのため、家中の人々は一つの部屋に集まり、この姉の到来を待っていた。皆は病人の回復を信じているが、盲人一人だけはよくならないと思いついでいる。その間に一人の孫娘が月明かりの下、外にいるいろいろな動物の反応から誰かが来たと言い出したが、人影がみえない。話していくうちにこの盲人はあたかも目が見えているかのように誰かがこの部屋に入ってきたと言い張ったが、誰も信じない。皆から盲人は気が狂っているのではないかと心配される。時刻が12時になるが早いか盲人は誰かが立ち上がったと叫んだが、居合わせた人々は一人も立ち上がっていなかった。その時、病人の部屋から看護婦が出てきて娘が亡くなったことを十字を切るという無言の形で皆に告げた。皆が驚きながら黙って盲人を一人残して死者の部屋に入る。皆どこに行くのかと訪ねる盲人の声で幕が下ろされる。

菊田茂男の論評に従えばメーテルリンクの作品を初期・中期・後期の三つの時期に分けることができる<sup>13)</sup>。初期作品の特徴として「当時根深く広がりつつあったヨーロッパの神秘主義思想の波を浴び、運命の神秘に驚き、その不可解・不可抗力の前に人間の無力を嘆き悲しむより外ない、という死と運命にまつわる暗い厭世的、神秘的宿命観に導かれたもの」と氏が述べているように<sup>14)</sup>、「闇入者」にもその思想が反映されている。その宿命論的運命観が実は陶晶孫の「黒衣人」の中にも潜んでいることを看過してはならない。これは陶晶孫とメーテルリンクとの接点を見つけ出す一つの重要な鍵である。

運命という言葉に直接触れた場面は「黒衣人」中に三回もある。初めて運命に関して描かれた場面は Tett が死の概念を抱き始めた時であり (場景Cの⑤)、黒衣人は以下のように語る (場景Cの⑥)。

そんなことを言わないで。僕たちはまだ長生きをするよ。君が生まれたばかりの時に、僕は僕の年齢が君より二十倍以上だと思った。後は十倍になって、五倍になって、間もなく二倍になる。更に一倍になったら僕たちは一緒に生きていこう。死のことを考えないで。運命の神様が命令を下す時には誰も反抗できない。

往事を思い出した黒衣人は止め処なく自分と似通った運命を持つ Tett との関係について語り、運命に関してこう感慨する (場景Cの⑥)。

君が三歳の時に初めて僕が君の指をピアノの鍵盤に触れさせた時から、君のことが好きになった——あの時から——僕と君二人とも運命に翻弄されてきた (後略)。

最後に錯覚に陥った黒衣人は松の枝等に向かい次のように叫ぶ（場景Dの⑤）、

さあ、名乗れ！お前たちが盗賊であろうと、外のものであろうと、僕は一切気にしない。お前たちが必ず来るのは承知の上だ。もし死神か、あるいは運命の神様か、あるいはそれらの使者が黒い翼を広げて飛んでくるなら、僕は何も言わない。もしお前たちが僕を銃撃しにきた盗賊ならば、僕は二階に上がって僕のライフル銃を持ってきて撃つ。

上の三つの引用文を読めば、黒衣人が抵抗せずひたすらに運命に従う姿がまざまざと読者の目前に表れてくる。誰も運命の神に背くことはできないのだと、父親の命令で当時東京から九州に流されてきた陶晶孫が主人公黒衣人を通して読者に強く訴えていることも分かる。こうした運命に対する観念の持ち方と「宇宙に唯一実在するものは神秘的な運命のみである。人間界の一切の出来事、——幸福や不幸や死等は、総て運命の操る傀儡劇にすぎない」<sup>15)</sup> というメーテルリンクの初期の戯曲に現れる諦観とは全く異曲同工の趣がある。言い換えれば、人生への煩悶を抱き始め運命を諦観する陶晶孫の当時の心境は正しくメーテルリンクの初期作品と共鳴しあうのである。

「黒衣人」と「闖入者」を比較分析してみると、前述した運命に関する位置づけはもとより、共に一つの神秘思想を背景とした象徴主義的戯曲ということも看過してはならない。両作品とも時間を夜に設定し、黒色を背景とした舞台は不安な気分にかりたてる。風が強くなり雨が降る気配を感じた黒衣人はTettの提言を受け入れ彼と一緒に部屋にいることにした。これに対して部屋が暗いと感じ取った祖父（盲人）は一週間雨が降り続いた上に空気が湿っぽくて寒いので叔父に外出を止めさせられ、自身も部屋にいたほうが良いと思う。「黒衣人」の雨の到来の直前の風景に対して、「闖入者」は雨が止んだばかりの夜のことを描いていることに両作品の違いがあるが、何れも雨と夜のせいで部屋に留まるしかないとする設定は一致している。既に述べたように「黒」という言葉は「黒衣人」の中で重要な意味を示している。「黒」は単に夜が暗い風景を表すだけではなく、黒衣人の特徴でもあり死神を代表する色でもある。一方、「闖入者」では目が見えない盲人は「晝も夜も、夏も冬もわからず」終始「闇」の中で生活している。しかしながら、目が見える人々よりも「目の見える時がある」と盲人は語る。誰も娘が死にかけていることに気づかず、ただ盲人だけが死神の到来を正確に感知している。こうしてみれば両作品における主人公は二人とも普通の人間というよりも死を告げる先知者として描かれていることが分かる。

次に、月の象徴的な描写手法が似通っている。「黒衣人」では、初めて月が出てきたのは〈表1〉の場景のEから場景のFに変わる場面である。黒衣人が廊下に倒れたTettを追いかけたところに、これまで真っ黒だった空がしだいに明るくなり新月も半分くらい雲から顔を覗かせてくる。Tettの死体を湖畔の横に移し、月光が顔を照らすようにおいた黒衣人がTettに接吻した時にも月が空にかかっており、横に黒雲が流れていた。最後に銃を手にした黒衣人は月光を仰ぎ、銃声が響く前に黒い浮き雲が月の下で流れ空が闇黒に戻る。こうしてみれば「黒衣人」の中で月が現れたのは何れも戯曲の後半部分である。それに対して「闖入者」で直接月が出現するのは、「黒衣人」と同様、戯曲の後半部分に当たる。

この時月光窓硝子の一隅より映して、室内の此處彼處に不可思議なる影を投ぐ。時計十二時を打

つ。其最後の響の時誰か急に立上がる如き音微かに聞こゆ<sup>16</sup>。

上の引用文の続きを読めば、急に立ち上がった人は室内にはおらず、それが盲人の娘が亡くなったことを告げにきた黒衣の看護婦によるものであることが分かる。月光と時を同じくして死を知らせるために現れる黒衣の看護婦という設定には、月の出現と Tett の死という「黒衣人」と同工異曲の趣があることを見落としてはいけないだろう。つまり、月光の登場が何者かの死を象徴するという創作手法は両作品に相通ずる。しかしながら、「闖入者」の中では、直接観客の視線を月に注がせたのはそれ一回しかないが、その前に月に関する描写が全くなかったともいえない。月に焦点を当てることなく登場人物の語りによって間接的に表現している。それは前後二回ある。初めは孫娘たちが庭から誰が部屋に近づいてきたのを感じ取ったが誰も見えないという答えたのに対し、その父親は「併し池には月がさしてるな」と口にする。また、灯りが風に消され暗闇にいる父親は「でも充分に見える。外から明るく光がくるから」と医者があるまで灯りをつけることをやめる。何れも目が見える父親が語るこの月はありのまま自然の月であり、暗喩・擬人化されていないことは一目瞭然である。

さらに、黒衣人と盲人の大人に対する態度が一致している。両者とも大人を嫌悪しているのである。

お前等のことを云ふんぢや無い、な、これお前達のことを云ふんぢや無いわ。……彼等がお前等の周囲に居なかったら、お前等が實を云ふのは善く知ってぢや……加之の、彼等が確かにお前達をも欺瞞して居るんぢや、今に明白る、な、子供達、今に明白る。何ぢや、啜泣しとるぢやないか、あ、これ。

この引用文は、狂気じみた祖父の話に怯えた孫娘たちに向かって祖父が語ったものである。「彼等」はここでは、大人である叔父と彼女たちの父を指している。これらの言葉の裏側に含まれている盲人の大人に対する嫌悪感が容易に読み取れるだろう。周囲の大人がいなければ子供たちも真実を話してくれるということは、子供が常に大人に支配されているということである。その上、子供たちも自分と同じく大人に騙されて生活をしていることをここで盲人が強く訴えている。このような盲人の大人に対する嫌悪感はここで取り上げた場面のみならず、作品の全体に亘ってこのようなニュアンスの言葉がところどころで仄めかされている。特に盲人の孫たちの叔父と父に対する不信感とは裏腹に、孫娘たちに対する信頼感がこの間の事情を物語っている。

主人公黒衣人と盲人の祖父の人物設定にも共通点がある。前述したように何れも死の預言者として、あるいは死神の分身として登場する二人は、劇の途中から狂気に陥ったような行動をとったり、暗示的に語ったりし、周囲の人々に否定されるにもかかわらず、自分の信念を一貫して持ち続ける。確かに目に見える人、あるいは正常の人にとって、二人の行動は狂っているように見えるが、その狂った行動ゆえに真実あるいは運命を感知することができるのである。換言すれば、正常の人間には運命の威力を感知することができない。我々に狂人だと認識される二人はその身に起こることをどのように考えているのだろうか。

僕はこれまでどうして発狂しなかったのだろうか？僕は気が狂った時、何も分からなくなる訳ではない。ある人は気が狂って石甕を持ち上げることができる。ある人は気が狂って火の中に飛び込む

ことができる。僕はただ狂うことができるだけ……ああ、もう遅い！（「黒衣人」）

最う私を欺瞞するのはおけ。遅過ぎるわな。お前等よりは私の方が眞實を知つとる……（「闖入者」）

こうしてみれば何れも自分の狂気を認めず、二人にとっては、正常だと思ふ人々こそが眞實が分からず狂気に陥っているのだといわんばかりである。

最後に、「闖入者」という題目に注目されたい。盲人が誰かが入ってきたと主張する場面に因んでこの題目がつけられたと見られるが、作品を一読すれば闖入者はわれわれの眼に見える人間のことを指しているのではなく、普通の人間が感知できないものであることがわかる。そして、当時のメーテルリンクの創作意図を考えれば闖入者が運命の神、ここでは死神を指していることは簡単に察知できるだろう。一方、「黒衣人」においては、上述したように題名が、単に兄のことを指しているのではなく黒衣に包まれた死神のことも含意されている。「聞いて御覧、誰かが入ってきた」という黒衣人の台詞から分かるように、両作品における闖入者の登場が相通じていることは一目瞭然であろう。

これまで五つの観点から両作品を比較分析してきた。かくして「黒衣人」はただ象徴手法のみならず、また、従来指摘されてきた月光、接吻という一つ、二つの断片的な類似性だけではなく、作品全体を通してメーテルリンクの「闖入者」からの並々ならぬ影響を受けていることが明らかになった。

#### おわりに

以上、「黒衣人」と「闖入者」とを比較分析した結果から、陶晶孫が作品を執筆した際にメーテルリンクからインスピレーションを受けた可能性が高いといっても過言ではないことが分かる。上述したように確かに現時点では当時陶晶孫がメーテルリンクの作品を読んだかどうか、はっきり断定することはできないが、両作品には闇黒の夜・不安が漂う室内の雰囲気・目に見えない宿命的な運命の力という様々な類似点から、両作品を同一の文芸的範疇に入れることが出来ることには異論がないだろう。特に、メーテルリンクの自然主義に対する反抗意識と、終始一貫して新浪漫主義に忠実であった陶晶孫の文芸思想にはやはり相通ずるところがある。1920年代の象徴主義が流行った日本文壇の雰囲気を考えてみれば、「黒衣人」は時代の趨勢に従って創作されたものだといえるだろう。

しかしながら、従来論者に論じられてきたワイルドの「サロメ」との類似点も全く無視することはできない。そのほか、「黒衣人」を読めば読むほど20年代の日中文壇に流行した幾つかの作品の影響を帯びていることも読み取ることができる。例えば、大人になることへの嫌悪感、つまり子供を賛美することと、魯迅の「狂人日記」<sup>17)</sup>の作品の最後に描かれた「人を食べたことがない子供がいるかもしれない？子供を救え……」という大人を批判する魯迅の語りぶりや、「狂人日記」に描かれている月の描写との類似性も見逃してはいけぬ。また、森鷗外の翻訳戯曲「白衣の夫人」<sup>18)</sup>における舞台の構成と、姉妹二人の運命に対する考え方との相似点とも比較する必要があると思われる。これらの相似点について、ここでは指摘することに止めたい。魯迅にしても森鷗外にしても日中文壇におけるこの二人の大文豪が文学を愛した陶晶孫の目に触れなかったはずがない。九州大学に入ってから北京にいる妹から「新青年」を送ってもらった陶晶孫は、この雑誌を通して魯迅の名を知ったと断じてよいが、国内に常に目を配っていた親密な郭沫若から度々魯迅の名を耳にしたに違いない。一方、森鷗外に関しては、陶晶孫の数少ない作家論の中の「学医的几个文人」を無視してはなるまい<sup>19)</sup>。この

小文から彼は自分と似ている経歴を持つ作家たちに最も関心を持っていたことが分かる。中学生になってから最も愛読したゲーテとシラーの名もあれば、よく知っている郁達夫と郭沫若の名もある。その中で、森鷗外についての紹介が最も長いことから彼の森鷗外に寄せる関心が圧倒的なことを窺い知ることができる。

九州帝国大学に入ってから文筆を取り始めた陶晶孫にとって、当時の創作は総て習作と言ってもよいただろう。従って、中国文壇に初めて登場したこの「黒衣人」も当然習作の一篇ということになる。当時の陶晶孫にとって、中国語による創作に挑戦することが無論大事なことであったかもしれないが、それにもまして重要だったのは、様々な創作方法試行と創作内容の充実だったはずである。これは彼が初めて『新青年』を読んだ際に、掲載された文章の思想に不満を持ったことにも関係している。すなわち、「黒衣人」を創作する際、陶晶孫は様々な優れた作家の作品を視野に入れつつ作品を構築したと考えられるのである。

(※本稿の中国語の引用文は拙訳に拠る。)

### 注

- 1)、初版は1927年に創造社叢書第十六種として上海創造出版社から出版されたが、本稿では1995年5月に人民文学出版社によって出版された『陶晶孫選集』を底本とした。
- 2)、同上。p163。
- 3)、攝生「讀了『創造』第二期後的感想」(『『創造』第二期を読んだ後の感想』)；『學燈』；時事新報館編輯；1922年10月12日。
- 4)、同上。
- 5)、吳曉東『象征主義和中国現代文學』；安徽教育出版社；2004年3月；pp. 61~73。
- 6)、朱壽桐『朱壽桐論戲曲』；江西高校出版社；2002年4月；p 347。
- 7)、例えば、朱偉華の「唯美主義劇作『黒衣人』解讀——兼論陶晶孫其人其文」(『中國現代文學研究』2002年第一期；作家出版社；pp. 231~239)、小崎太一の「陶晶孫と福岡」(『中國現代文學と九州』；九州大學出版會；2005年4月；pp. 77~98)等。
- 8)、下線部分は総て筆者によって付け加えたものである。それ以下も同様。
- 9)、1927年に『音樂會小曲』を出版する時に、初出ではショパンの「Funeral March」の第二番であったものをベートーヴェンの「葬送」に書き直した。また、「僕はそれを弾くとまるで自分が棺の中に眠り込んで誰かに葬送されているように」を「僕はそれを弾くとまるで最も親愛する人を棺の中に入れ、僕自身は葬送をしにいくように」に書き直している。
- 10)、朱偉華の「唯美主義劇作『黒衣人』解讀——兼論陶晶孫其人其文」の中で幼女の像がTettの化身であることが指摘されている。
- 11)、前掲7)のほか、肖同庚『世紀末思潮与中国現代文學』(安徽教育出版社；2004年3月)の中で「黒衣人」と「サロメ」との関連性と、吳曉東『象征主義和中国現代文學』(安徽教育出版社；2004年3月)の中で「黒衣人」と象徵主義の関連性について述べられている。
- 12)、中村吉藏訳「サロメ」；『ワイルド全集』第二卷戲曲集(オスカー・ワイルド著；矢口達編)；初刊1920年に天祐社により刊行されたが、拙稿では1995年10月に日本図書センターによる復刻版による；p 3。
- 13)、菊田茂男「メーテルリンク」；『欧米作家と日本近代文學3 ロシア・北欧・南欧篇』；教育出版センター；昭和51年1月；p275。

- 14)、前掲、菊田茂男「メーテルリンク」： p276。
- 15)、「序説」：メエテルリンク作『近代劇大系』第十卷 佛及南歐篇〔1〕：近代劇大系刊行會：1923年4月：p 5。
- 16)、「闖入者」に関する引用文は総て前掲『明治翻訳文学全集 メーテルリンク集』による。
- 17)、「狂人日記」が発表されたのは1918年の5月の『新青年』第4巻第5号である。
- 18)、リルケの「Die weisse Fürstin Erstin.Eine Szene am Meer.」から翻訳された戯曲。初出は『演藝画報』（1916年1月1日発行）第三年第一号。
- 19)、陶晶孫「学医的几个文人」：前掲『陶晶孫選集』：pp. 231～233。

## About “Kokuyijinn”

Liao Liping

As the maiden work in the literary world of China, the work “Kokuyijinn” was regarded as the most important one in the few works of Jingsun Tao. To date, the most readers of “Kokuyijinn” mainly put the focus on the leading character “Kokuyijinn” and had an argument on the praise of death from the point of work analysis, while from the technique of literary creation they tried to discuss it in comparison with the work of “Salome” of Wilde . However, in the present article, we changed the usual angle from which the death was praised, then we analyzed this work again by taking the relationship of Kokuyijinn and Teet into account and tried to provide a new interpretation. In addition, by taking up the relevance to Maeterlinck’s “L’ Intruse”, we also tried to explore the Jingsun Tao’s motivation of creation.